ひと

今回も思い出に残るお同行さんたちを前坊守村上悦美に紹介してもらいます。

鐙畑地区のお同行たち

昭和四十年頃、鐙畑への大きな道路が出来、徐々に車も普及してきましたが、上高屋と鐙との行き来は十城峠越えの徒歩でした。当時の様子を郷土史『みやこ』（第六号）に綴り、『野仏のたわごと』（西日本新聞社、渡辺一樹著）にも紹介していただきました。

お寺へのお詣りは同行さん達が賑やかに連れのうて来られ、法の座についておられました。そのお姿が忘れられません。代替わりしましたが土徳は染みついており、次世代の方々が御正忌前の境内の清掃奉仕に精を出して下さいました。色々のご縁がありまして、各戸に前住職がお念仏の掛け軸を贈りました。その御礼に記念の灯籠が建立されました。

時代は移ろいますが、一人ひとりに遺されてある尊い光が今も包んで下さっています。

以下は、平成十八年に郷土史に載せた詩です。

記念の灯籠

一、袖や菊の　香の滲む
　法の水の　流る郷
　サラシナショウマ　無垢の白
　鐙思うて　清々し

二、五十年前の　ご法事は
　住職法衣を　斜にかけ
　しりからげして　峰伝う
　杖を頼りの　山路なり

三、法事ののちは　お名残と
　見送る十城　峠にて
　わらじをはけと　酒すすむ
　両手に余る　ナラジャワン

四、一杯だけは　片わらじ
　一足のみは　破る故
　もう一足と　ほださるる

五、思えば雪の　積むもあり
　夏は小川に　汗ぬぐい
　山路の色の　身に染みて
　まみえし人の　こころばえ

六、お寺詣りの　お同行
　誘い合わせて　連れのうて
　真木野の郷の　牧野家で
　お茶をよばるる　行き帰り

七、還浄されし　釋、釋尼
　まなうらにある　あゝ和顔
　山の暮らしに　身を砕き
　上り下りの　いばら道

八、仏の教え　縦糸に
　日々の生活を　横糸に
　心豊かな　日暮らしの
　無量無辺の　縁の中

九、雲の棚引く　山間の
　楽音寺さんの　法座には
　村中こぞり　法を聞く
　土徳ます　善男女

十、谷戸の同行　たおやかに
　辛抱強く　身を粉にし
　自然の内に　包まれて
　深き人世の　鐙畑

これからの時代に望むこと

吉田昭和（北九州市小倉北区）

昨年から、身近な人の訃報に接する機会が増えた気がする。私も相応の歳になったのかも知れない。最近終活・断捨離と言う言葉が聞こえており、私も「そろそろか？」と思っている。私は「団塊の世代」である。

私の子供の頃は日本全体が今の様に豊かでなく、貧しい時代であった。私は両親のお陰で不自由を感じない生活であったと思っている。今も、子供たちと孫に恵まれ、老後を楽しんでいる。この様に私の人生は恵まれたものであったと、多くの人たちに感謝している。

最近、世の中は、コロナ、地震、風水害と多くの人々が災難に見舞われている。何度となく被災される方も多いと聞く。復興の努力をされている方々の心中は、如何ばかりかと思う。

自然の前では残念ながら、人類は無力と思わざるを得ない。

コロナは何とか人の力で抑え込もうとしているが、地震・風水害への対応に多くの研究者達が取り組んでいるが、まだ、被災防止策は出来ていない。私たちの時代は、高度成長期で、自然への配慮等不足し、その結果が最近の自然災害の引き金になったのではないだろうか？

子供、孫達の様な若い世代が、これからの人生で、自然災害に少しでも苦しむ事が無い様な時代になって欲しいと願っている

お参りの日々

念信寺衆徒　村上　宣（とおる）

秋も深く、北海道は気温が下がり寒くなってきました。福岡はどうでしょうか？

気づけば、北海道暮らしも半年が経ちました。京都でも、4年間暮らしていたので、今更ホームシックになることもありませんが、ワクチンを接種して副作用で2日間、熱にうなされた際は、家に人がいる「ありがたさ」を実感しました。

今回、住職に「将来・未来について書け」と言われた時、「何を書けばいいか、私が何を書きたいのか」が分からずにいたのですが、それは漠然とした不安感が将来にあるからだと今は感じています。

何をどうだと具体的に言葉にするつもりはありませんが、誰もが感じるものであると思います。将来どうするか。まだわかりませんが、不安が解消できるよう考えていけたらなと思っています。

本人なりの悩みがあるようです。笑。人間は不安があるからこそ行動する。いいことでないかと思います。（住職）